

## 【書評】

### ピーター・クラーク（関谷喜三郎・石橋春男 訳） 『ケインズ——最も偉大な経済学者の激動の生涯』

中央経済社，2017年，iii + 296頁

本書は、Peter Clarke, *Keynes: The Rise, Fall, and Return of the 20th Century's Most Influential Economist*, Bloomsbury Press, 2009 の翻訳である。著者ピーター・クラークはイギリス近現代史の大家として知られるが、ケインズについても何冊か著作がある（*The Keynesian Revolution in the Making, 1924-1936* (1988), *The Keynesian Revolution and its Economic Consequences* (1998)）。

本書はイントロダクションとエピローグを含めて6つの章からなる。第1章「宗教と不道徳」および第2章「天空の最左翼で」がケインズの伝記、第3章「長期では、われわれはみな死んでしまう」が経済政策、第4章「アニマル・スピリット」が経済理論の考察にあてられている。

イントロダクションでは、「ジェットコースターのような」ケインズの評価を振り返っている。過去90年にわたり、ケインズは「褒め称えられ、軽蔑され、尊敬され、利用され、からかわれ、崇拜され、再発見されてきた」が、無視されることは一度もなかった(3)。このようなケインズ評価の変転の原因として、ケインズ思想は、彼が生きた時代に影響を受けている点が指摘される。ケインズは様々な問題について、その生涯で何度も考え方を変えてきた。これは時に変節と批判されることもある。しかし、時代の問題に真摯に向き合った結果、その時々で適切と判断される立場が変化するのはおかしなことではない。そのことを考えると、歴史的文脈のなかでケインズを捉えることは重要な作業であり、それを担

ううえで著者はうってつけの人材といえるだろう。

各章の概要を紹介するかたちでは本書の特徴が伝わりづらいと思われるので、以下では興味深い指摘をいくつか紹介していきたい。

1930年代を通じてケインズの経済政策はイギリスよりもアメリカで議論的であり、ニューヨークタイムズ紙には、ケインズの名前が1930年代ではほぼ400回、1940年代では500回も登場するという。記事は必ずしも好意的なものばかりではなく、先頭に立って社会主義に向かう実験をしている邪悪な天才としてケインズを非難する人々もいた(11)。

ケインズはマルクスに関心をもたなかったが、それは「資本主義は内部矛盾によって生き残ることはできないと予言した決定論者」というマルクス理解にもとづいていた。他方、「人間の力で社会改革を成し遂げるといふ精神を高揚させるような若きマルクスの文言」は、1960年代に再発見され広められるまで、ほとんど知られることはなかったと著者は指摘している(108)。

ハロッドのケインズ伝にみられる制約や欺瞞については、すでにスキデルスキーが詳しく論じているところではあるが、著者は時代背景を踏まえた以下の点を指摘している。「ハロッドの執筆は制約を受けた。まず、ハロッドは使用する政府関係の資料に関して検閲を受けなければならなかった。有力な官僚がハロッドの原稿を精査した。とりわけ懸念したのは、アメリカ、イギリスの冷戦同盟に障害となるものがあるかどうか、ドル不足の

世界での最後の拠り所である銀行の機嫌を損ねるものがあるかどうか、ということであった」(17)。「エリート経済学者の性的倒錯といった類の後ろめたい秘密を公表すること以上に、何がマッカーシー時代のアメリカの気分を害することになったであろうか」(17-18)。

アスキスやロイド・ジョージなど当時のイギリス政界の人間模様、そのなかでのケインズの立ち回りについての生き生きとした描写には、歴史家としての著者の強みが発揮されている。アスキスとロイド・ジョージの対立はほぼ10年間、自由党を混乱に巻き込んだ。ケインズはもともとアスキス陣営におり、ロイド・ジョージの平和条約に対する指揮を酷評していたが、経済政策の要が失業問題であるという点では考えが一致し、その点でロイド・ジョージ支持にまわるのにもやぶさかではなかった。また、ケインズは自由党と労働党が共同していくことが望ましいと考えるようになった。しかし、効率を犠牲にせず公正を達成する有効な手段があるか否かについては、両党は意見の一致をみなかった。

晩年、ケインズは下院議員に選ばれるチャンスがあったが、それを固辞した。その理由は、新米の下院議員になるよりも、在野にいて自由に発言できる方が、大きな影響力を発揮できるからであると著者は述べている(119)。

サッチャーはケインズ主義に対しては批判的であったことで知られているが、ケインズ個人についてはむしろ「ケインズが考えていたことは、そんな矮小なことではないと思う」と擁護している。また、フリードマンの「自然失業率」の概念は政治的に極端すぎた可能性があり、サッチャーは政権中にフリードマン支持をやめたことがあるという(25-26)。

ケインズを取り巻く研究環境のあり方については、「調査研究が重視される現代の水準からみた個人の知的財産という意味では、サーカスのメンバーもケインズと同様に大きな弱点をもっていた。彼らは皆、誰かのものを盗作するという意識をもつことなしに、さらには剽窃についてほとんど語ることもなく、お互いの知識を共有していた」(199)。

他にも、ムーアやブルームズベリー・グループからの思想的影響とケインズ経済学との関連、リディア・ロポコヴァとの幸せな結婚生活、大蔵省との関わり、投機活動、ルーズヴェルトおよびニューディール政策に対する評価、『一般理論』形成過程におけるホートレーやロバートソンとのやりとり、対米交渉等が論じられている。

伝記的著作を評価するのは難しい。言うまでもなく、ケインズの伝記については、既にハロッドやモグリッジ、スキデルスキーらの素晴らしい業績がある。それらに比べると、本書は小さな本である。何が書かれているか、ということでは、情報量で上記の大著に及ばないのは当然のことである。しかし、百人いれば百通りのケインズ像、ケインズ解釈があり得る。本書は歴史家の描いたケインズ伝であるという点に独自性があるが、経済学に関しても決して門外漢の仕事ではなく、経済理論や経済思想についても正確な知識に裏打ちされた叙述がなされている。そしてイギリスの政治的・経済的文脈に照らしてその時々でケインズが最善と判断した行動を丁寧に描写している。限られた紙幅のなかで、各所に目配りの効いたバランスのよい解説を提供しており、一般読者にも研究者にも読んでもらいたい一冊である。

(伊藤宣広：高崎経済大学)